

介護の責任から逃れる「言い訳」を探していませんか



あなたの家族の誰かが介護が必要になった時、介護の分担を決めるのに、何が決定的な要因になるでしょうか。介護の負担から見えてくる問題について、息子による介護の研究を専門とする研究者にお話を聞きました。

性別、賃金の高低、扶養する家族の有無...の中で、育児や介護など家族の面倒を見る責任を免除されやすい属性のことを「正当な言い訳」と呼ぶことがあります。男だから、賃金の高い仕事を続けているから、扶養する家族をすでに持っているから、自分は育児や介護を担う責任を当然免除されるはずだ、と考えてしまっような属性のことです。「正当な言い訳」には他にも多くの属性があります。兄弟の中で親と同居しているのが自分だけであったり、フ

介護責任の構造的な偏り

性別、賃金の高低、扶養する家族の有無...の中で、育児や介護など家族の面倒を見る責任を免除されやすい属性のことを「正当な言い訳」と呼ぶことがあります。男だから、賃金の高い仕事を続けているから、扶養する家族をすでに持っているから、自分は育児や介護を担う責任を当然免除されるはずだ、と考えてしまっような属性のことです。「正当な言い訳」には他にも多くの属性があります。兄弟の中で親と同居しているのが自分だけであったり、フ

性別、賃金の高低、扶養する家族の有無...の中で、育児や介護など家族の面倒を見る責任を免除されやすい属性のことを「正当な言い訳」と呼ぶことがあります。男だから、賃金の高い仕事を続けているから、扶養する家族をすでに持っているから、自分は育児や介護を担う責任を当然免除されるはずだ、と考えてしまっような属性のことです。「正当な言い訳」には他にも多くの属性があります。兄弟の中で親と同居しているのが自分だけであったり、フ

女性の苦労は社会に共有されてこなかった

介護や育児など、家族の面倒をみる担い手は、以前はほぼ女性しかいませんでした。家族介護に伴って起こりがちな虐待・孤立・介護離職といった問題は、現在は大きく取り上げられることが多いですが、担い手がほぼ女性だけだった時代には顕在化していなかっただけで、ずっと前から起こっていた問題です。介護に直面する男性が近年増えてきたために、ようやく社会問題として語られるようになってきたのではないのでしょうか。

例えば介護離職は、昔から多くの女性が直面していた問題です。実の親、義理の親の介護のために仕事をやめざるを得ない女性は山のようにいました。女性の社会進出が進んだとされる現在でも、賃金が夫や兄弟よりも低かったり、フルタイム労働でなかったりすれば、女性が介護を担うのが当然と考えられがちです。

平山 亮氏

東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 研究員

1979年神奈川県生まれ。2003年東京大学文学部卒業。2005年東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。2011年オレゴン州立大学大学院博士課程修了、Ph.D.(Human Development and Family Studies)。著書『迫りくる「息子介護」の時代』(共著、2014年)、『介護する息子たち 男性性の死角とケアのジェンダー分析』(2017年)など。



「言い訳」に頼らない意識
男性が育児や介護に関われない理由としてよく「長時間労働」などの就労システムが理由に挙げられますが、はたして就労システムが変われば男性が育児や介護の責任をすんなり担うようになるのでしょうか。例えば福井県は、女性の正規雇用率が高く、かつ女性の家事時間も男性よりはるかに長いというデータがあります。男性の就労責任が相対的に減少しているのに、家事の負担は女性に偏ったままなのです。したがって、就労システムで男女が平等になつたとしても、家族の面倒を見る責任も男女平等になるかということには疑問があります。育児や介護などがしやすい環境を整えるのはもちろん必要ですが、責任から逃れるために言い訳にしがみついたりするようない意識は、個人レベルで変えていく必要があります。



表紙のグラフは...

A. 介護をしている人の男女比



男女が協力し、安心して介護をできる社会に向けて

現在、全国で介護をしている人は約87万人おり、女性が約63%、男性が約37%となっています(平成29年 総務省「就業構造基本調査」より)。この数字が示す通り、介護は性別による負担の偏りが大きいといえます。なぜ性別による負担の違いがあるのか、安心して介護をするためには何が必要なのかを、考えてみましょう。

近年は少子高齢化の進行によって、家族介護する側の低年齢化が顕著になっています。これにより、介護を理由として仕事をやめる「介護離職」問題が、将来さらに深刻化することが予想されます。介護や看護をするために離職した人が1年間で約10万人いるとされ、その内の約8割は女性です。

女性が家族の世話を期待されがちに

なぜ、家族の介護における負担に男女の違いがあるのでしょうか。介護は、育児と同様に家族内で世話をする仕事という固定観念が強いと言われます。男性は外で仕事に専念し、介護や育児は女性が主に担うことが期待されるという、固定的な性別役割分担の意識が現在も根深く残っていると考えられます。「嫁」が自身の親、義理の親の介護をすることが多かったのです。以前と比べて女性の社会進出や少子化が進んだこと等により、今後は男女を問わず、いわゆる「働き盛り世代」が介護に直面することが増えることが見込まれています。

長時間労働を減らして介護もやりやすい環境へ

しかし、近年は「働き方改革」が進み、ライフステージに対応した多様な働き方が増え始めており、介護や育児を想定した働き方への取

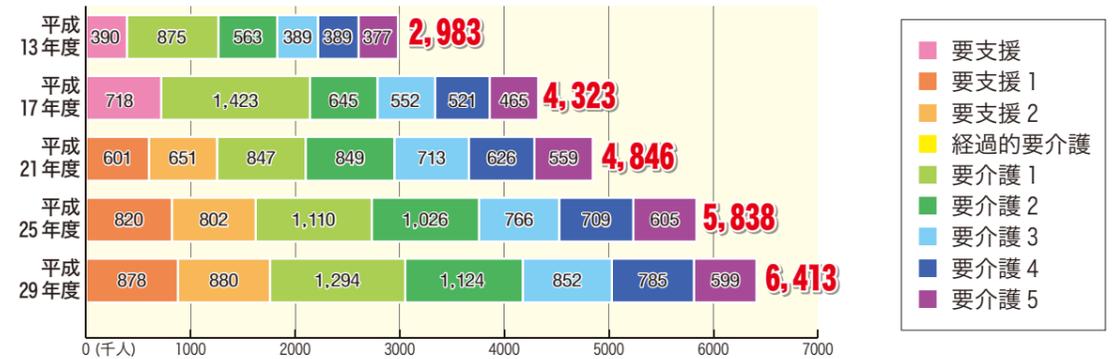
り組みが始まっています。労働時間は減少傾向にあります。週5勤務が60時間以上の割合は、40歳代男性が最多で13.8%に達する(令和元年 内閣府「男女共同参画白書」より)等、依然として長時間労働の問題への対応が求められています。労働時間の短縮等の「働き方改革」が、男女とも育児や介護に参加しやすい職場環境の形成につながることを期待されます。

介護を自身のこととして考える

一方で、個人としてできることには何があるのでしょうか。介護は育児と違い、予期せず始まることもあるため、事前に準備することが難しいのが一つの特徴です。まだ先のこととは考えず、早くから、介護支援やサービスのみならず、家族の基本情報など、介護について必要な情報を整理しておくことが大切です。介護が必要な状況になったとき誰もが安心して介護し、介護されるような社会を目指して、全ての人が介護を自身の問題として捉えていくことが重要です。

要介護(要支援)認定者数の推移

厚生労働省「介護保険事業状況報告書(年報)」より作成



※平成29年度から全市町村で介護予防・日常生活支援総合事業を実施している。 ※東日本大震災の影響により、平成22年度の数値には福島県内5町1村の数値は含まれていない。

ダブルケアとは?

家族や親族の中で、複数の世代のケアに同時にあたることをいいます。特に、子育てと親の介護を同時進行で担うことを指して使われることが多い言葉です。現在、全国で約25万人がダブルケアを担っている*と推定され、将来ダブルケアに直面する人も数多くいとされています。

*内閣府「育児と介護のダブルケアの実態に関する調査報告書」より